

エコライフのノウハウを体験伝授する

エコビレッジライフ体験塾（札幌市）

「そろそろお昼にしませんか」スタッフの一人が昼食の時間であることを告げた。が、だれ一人として手にしていた鍬を放そうとせず、喜々として畑仕事に熱中している。こんな呼びかけが二度、三度。「オーイ、めしが冷えるぞ」。だれかの一声で一同はようやく仕事の手を休め、汗をぬぐい、手を洗ってランチテーブルについた。みんな農作業が楽しくてたまらないといった様子。食事の間中も「今年も稲は順調に育っているよ」、「キュウリは大きくて立派だね」と、農作業に関する会話が弾む。

ここは「エコビレッジライフ体験塾」の実践農場がある空知管内長沼町の田園地帯。農業体験に参加している二十数人の塾生は、全員都会生活者で、田の草取りや畑で鍬を振るう手付きはいまひとつぎこちないが、みんな「本当の人間の生き方はこんなものだ」といった満足気な表情を浮かべている。体験塾なので実際に共同生活をしているわけではないが、全員ビレッジの一員になったような感覚で、体験日の当日、充実した一日を過ごしている。



今年の稲の育成は上々ねー坂本塾長（右）が見守る中、田の草取りに精を出す塾生たち

■ 脱サラして夢実現

「エコビレッジ」とは、衣食住など暮らしに必要なものはできるだけ自分たちの手で作り出し、環境にやさしく、人間らしいスケールとペースで生きてゆこうという人たちの共同体。英国やヨーロッパで始まった持続可能なまちづくりの生き方が世界へ広がった。脱石油、地球温暖化時代の新しい暮らし方なので日本語に訳すのは難しいが、いってみれば環境共生型の相互扶助的共同体といおうか。イスラエルの“キブツ”や、日本の“^{ゆい}結”の制度の近代版といった方が適切かもしれない。不穏で不安な社会状況を反映してか、あるいはコンクリ

ートジャングルを走り続け息切れしたせい
か近年、日本でもこうした暮らしを求める
人々が増えている。長沼での塾はこうした
人たちに、その暮らし方や生き方、方法な
どを実体験と講座で学んでもらおうと、3
年前に札幌市の元市職員、坂本純科さん
(43) が始めた市民活動。北海道ではまだ
数少ない存在だが、受講希望者はけっ
多く、主宰者側は年間スケジュールの消化
に追われている。

坂本さんは大学の農学部を卒業後、いっ
たんは札幌市役所職員に。学生時代から、
農業を農作物の生産もさることながら、そ
れをやることによって心がいやされ、対話
がはずみ、とりわけ子供は其中で自然に、
豊かに育つという教育福祉効果が高いこと
に着目していた。機会をとらえて地域の人
たちの協力を得、公園や空き地で花壇や畑
づくりを行った。しかし公務員の立場での
そうした行為は何かと制約があることを痛
感。夢を実現するためには独立するしか
ないと判断し脱サラ。札幌で環境まちづくり
や国際協力のNPO活動に関わった後 2006
年、本場のエコビレッジライフを学ぶため
に英国、ヨーロッパを歴訪。自らもビレ
ッジに加わって「これからの時代、真の人間
らしい生き方はこれだ」と確信して帰札。
2008 年、長沼に田畑と空家を借り、塾開設
にこぎつけた。



雑草は根から引き抜かなきゃ。会話を交わしながら女性たちのガーデン農場の手入れが続く

■ 塾生 20 数人、待望の田畑体験開始

初年は借地、借家の交渉や、借りた空家の整備などを行う一方、札幌、千歳など都市部を中心にPR活動を展開。関心が高まったところで、2009 年、いよいよ開講。サラリーマンや主婦らを中心に 20 人あまりが集まり、教室での座学と、長沼での農業体験でスタートした。学習は講義、実習をあわせて毎土日と祝日で年間 4、50 日。塾が招いたそれぞれ専門の外部講師から農作業など自給自足の生活をはじめ、エコ住宅のあり方や内容、環境にやさしいエネルギー、地域通貨のシステムなどエコ生活に必要なさまざまな暮らし方を学び、実際にビレッジ生活に参加した際の知恵と技術と心を磨いてゆく。受講料は今年は一人年間 7 万円だが来年以降は未定。

開設 2 年目の 2010 年は、新規参加の 17 人に、前年からの継続者 7 人を加え塾生は総勢 24 人。会社員、主婦など職業はさまざま、年齢も 20 代から 60 代まで幅広い。大

半が札幌、千歳、江別などの都市生活者だが、自給自足型で環境にやさしく、助け合いを目指すエコライフを求めていることは共通している。

「必要なものは自分たちで作り出す」の最も手っ取り早く典型的な作業は農業だ。長沼に田畑を用意したのもそのため、そこを体験場としてベテラン農家の指導を受けながら、みっちり米づくり、野菜づくりに挑戦している。環境に負荷をかけない、が原則なので水田、畑とも有機、無農薬栽培だ。水田希望者は春4月、用意された苗を約10アールの水田に田植え。去年は、初体験とあって苗はぐにやぐにやに並んだが、今年は前年の経験から縄を張ったので、きちんと一列縦隊。7月中旬草取りをした時は稲は立派に根付き、分けつ（根の部分の枝分かれ）も進んで秋の豊作を約束。参加した札幌の会社員の男性は「腰が痛いけどとっても楽しい。初体験ですがやみつきになりそう」と最高の笑顔。

一方の畑体験者は、学習住宅の前面に広がった英国風ガーデン農場で草むしりと夏野菜の収穫作業。円形のもザイク状に広がった農場は、自然防虫の狙いからハーブと野菜が混在しており、花壇なのか畑なのかわからないたたずまい。その中で農衣に身を包んだ女性らが談笑しながら草むしり。先生役の女性園芸師が「雑草は葉だけむしってもダメ。ショベルで根を掘り起こし、引き抜くと同時に土の中に新鮮な空気を入

れて活性化させるのですよ」とソフトに指導すると、全員、うなづいて納得の顔。昼直前には水田組も合流して秋野菜の種まき準備を終えたところで昼食となった。



自分たちが栽培、収穫したサラダが減法おいしい。車座になってランチを楽しむ塾生の面々

■ 理想実現に輝く若い瞳

ランチはガーデン内の一角にしつらえられた板と丸太の野外即席テーブルで。目の前の畑で穫った夏野菜たっぷりの豪華サラダを中心に、現生活に少し妥協して近くの店から買ってきた魚貝、調味料を使っただのパエリアやチャウダーといったメニュー。全員が車座になって「いただきます」。自分たちで作り、しかも午前中の労働でたっぷり汗を流した後とあって、みんなすさまじい食欲で、みるみる大皿や鍋が空になっていった。

食後の後は一服して、夕方までさらに一働き。この日、幼い子ども連れて畑仕事に参加した千歳の主婦は「エコビレッジライフの一端を味わえてとても楽しかった。同

じ思いを持つ大勢の仲間とも知り合えたし、心身ともにリフレッシュできました。明日からまた元気で働けますわ」と大満足の感想。

塾はこのあと年内に、秋野菜の種まき、収穫、稲の刈り取り、はさ掛け、脱穀といった農作業体験をはじめ、穫れた野菜を使ってのピクルス、手造りミソの仕込みなどの実習、ニワトリの精肉づくり、堆肥づくりなど今年のカリキュラムを消化し、一年間のスケジュールを終える。主宰者の坂本さんは「塾の経営は、塾生の会費と各種団体からの補助金でぎりぎり、とても自分の取り分まで回りません。でもみんなこれだけ喜んでくれてますし、将来はエコビレッジそのものを開きたいと思っていますので、いまは毎日が楽しくて仕方ありません。この中から参加してくれる方がでてくるかもしれませんし、それがなくても、この人たちが核になってエコビレッジのすばらしさが一般に広がれば本望です」と若い瞳を輝かせた。



■ 連絡先

〒064-0959 札幌市中央区宮ヶ丘 2-1-1-303

運営事務局 坂本 純科

TEL : 090-1303-6485 / FAX : 011-640-8422

Email : junkasakamoto@gmail.com

開催場所 : 夕張郡長沼町東 5 線北 18 番地

エコビレッジハウス